北松竹の焼け跡に建つ教会　1954

仙台教会の歴史シリーズ　その 12

小林孝男

１．北松竹映画劇場の跡地に建つ教会

私たちの教会は、焼失した映画館の跡地に建てられました。そのことをご存じの方は多いでしょうが、映画館の名前までご存じの方は少ないでしょう。教会の二軒隣に生まれたかく言う私も知らなかったのですが、教会の年表作りで古い週報をめくっていた時に、W さんが書いた牧会通信（2003 年 6 月 1 日）が目に留まり、その文章の中に映画館の名前を見つけました。「北松竹映画劇場」です。

そこでこの北松竹について調べてみると、いろいろ興味深いことが分かりました。収容人数 1000 人程の比較的大きなこの映画劇場は、敗戦後 6 ヵ月の 1946 年 1 月 25 日に開館しています[1]。1 月 23 日付の河北新報の囲み広告には、「愈々25 日開館　豪華絢爛披露番組」として、「豪華実演　松竹少女歌舞団一行　三日間公演」、「歌と踊りのスペクタクルレヴュ映画　グランドショウ 1946 年」とあり、三日間は実演と映画の二本立てで、なかなか華々しく開場した様子がうかがえます。

北松竹の運営会社は東北興業です[2]。この会社は東北の開発促進を目的に制定された、「東北興業株式会社法」（1936 年）という法律に則って設立された会社です。当時の社長は伊澤平勝（東北の財界人と繋がりのある人物）、専務は松尾敬三（東北最大の的屋グループと繋がりのある人物）で、北松竹を開館した 3 ヵ月後には、南町に南松竹映画劇場を開設しています。しかし、1948 年 2 月に南松竹が、8 月には北松竹が火難を被り、北松竹は焼失後再建されることなく短命に幕を下ろしてしまいました。もし、北松竹が再建されていれば、私たちの教会はここには建っていなかったことになるのでしょう。

仙台空襲で町の中心部が焼け野原になり、敗戦で多くの人たちが意気消沈する中、庶民に娯楽を提供するために戦後半年足らずで新しい映画館を建設し、華々しく開館させるこのしたたかさ、生命力、行動力には、「すごいなあ」と感心させられます。東北興業は庶民が何を望み、何を求め、何を待っているかなどの心の機微や、時代の趨勢を敏感に感じ取る才に長けていたのです。勿論絶対条件はそろばん勘定なのでしょうが。

２．この世のど真ん中に建つ教会

さて、わが北松竹の火災は不審火とのことです[3]。この業界特有の利害絡みの何らかの抗争が背後にあったことも考えられます。人々に喜びや安らぎや希望や光を与えてきた北松竹も、その背後には妬みや争いが複雑に絡んだ闇を抱えていたということなのでしょうか。その同じ場所に私たちの教会が建っているのは、何か暗示的です。私たちの教会も光と闇が交錯する「この世」のど真ん中に建てられています。つまり私たちの教会がここに建っているという事実は、人々の様々な思いやどろどろしたこの世の現実としっかり向き合う中で、主から託されている聖なる使命を担いつつ歩まなければならないということを、いつも私たちに思い起こさせてくれているのです。

３．武家屋敷街区に建つ教会

ついでにもう少し時代を遡ってみます。仙台教会は北四番丁北側に面し、勾当台通と北鍛冶町の間に位置します。仙台城下では北番丁と東番丁は武家屋敷の街区でした。また、町屋敷の街区は奥州街道沿いに配置されましたが、教会近くの二日町や北鍛冶町のある通りが奥州街道です。

町屋敷と武家屋敷の街区は、木戸によってはっきり区切られます。町屋敷の奥行きは一律25間(約45m)でしたので、この一画の木戸の位置は、丁度「木町通二丁目」バス停辺りであったのでしょう。そして木戸から東に、間口14間(約25m)あるいは17間（約30.6m）の武家屋敷が連なります。石高のランクで間口が異なりますので、この地域には100石以上～300石未満の武士が住んでいたことが分かります。また敷地の奥行に関しては、100石以上の武家屋敷は30間(約55m)が基準です。ですから一丁の間に、武家屋敷が背中合わせで配置されたことになります。

さて、私たちの教会は、北鍛冶町の町屋敷街区と北四番丁の武家屋敷街区を分ける木戸から、東に4番目の武家屋敷の跡地に建っています。古地図で調べると、そこは三百数十年前「志村長蔵」の屋敷でした[4]。その後しばらく時を経て「芳賀正左衛門」の屋敷となり[5]、幕末近くの地図[6]では「相原石一」の屋敷となっています。武家屋敷に名前が書きこまれている古地図は他にもありますが、残念ながら判読できません。

とにかく仙台教会が建つこの同じ場所を舞台に、幾人もの仙台藩士やその家族

が、喜怒哀楽の渦巻く様々な人生を送ってきました。今、同じ場所に集う私たちもまた、様々な人生を生きていることに変わりはありません。ただ、昔の住人と決定的に異なることがあります。それは、人生の導き手であり「助けの石」（サムエル上7:12）である主イエスを私たちは確かに知っている、という点に他なりません。そのお方の導きのもと、喜怒哀楽の出来事が日々押し寄せてくるそれぞれの人生を、私たちは希望をもって歩むことが許されているのです。

---

[1] 資料（1982/00/00_仙台映画大全集）453 頁
[2] 同上 454 頁
[3] 同上 454 頁
[4]「仙台城下絵図」 延宝･天和年間　1673～1684 年ごろ
[5]「仙台城下五釐掛絵図」 元禄年 4～5 年　1691～1692 年ごろ
[6]「安政補正改革仙府地図」 安政 3～6 年　1856～1859 年ごろ